

ガザリー著『幸福の錬金術』解説および試訳

松浦義夫

解説

イスラーム思想史において、特にイスラーム神学の分野において最も重要な人物を一人あげるとすれば、アブー・ハミド・ムハムマド・アルガザリー（一〇五八一—一一一、以下ガザリーとする）であろう。彼は、ラテン名アルガゼルとしても知られており、イスラーム史上最も偉大な思想家の一人である。イランの北東部ホラサン地方のトゥースに生まれ、ニーシャープールのニザーミヤ学院で、当代随一の学者であるイマーム・アルハラマインのもとで法学ならびに神学をはじめ、イスラーム諸学を修め、師の没後、セルジューク朝の宰相ニザーム・アルムルクによって推挙され、一〇九一年イスラーム世界の最高学府であった、首都

バグダードのニザーミヤ学院の主任教授に就任し、名実ともにイスラーム思想界の最高権威となった。しかし、バグダードの教授生活のかたわら哲学を研究しているあいだに、理性と信仰との矛盾を感じて深い懷疑におちいり、一時は言葉を発することもできないまでになった。一〇九五年教授の地位を捨て、家族とも別れて、放浪の旅に出、ダマスカス、エルサレムを経てメッカに巡礼し、二年後には故郷のトゥースに帰り、完全な隠遁生活にはいった。その間、少数の弟子を指導するかたわら、著述に専念し、多くの著書を残したが、『哲学者の意図』、『哲学者の矛盾』、『迷いからの救い』、『宗教諸学のよみがえり』などがとくに重要である。なかでも『宗教諸学のよみがえり』（イフヤー・ウルーム・ウツ・ディーン）は、彼の思想の集大成で

あるとともに、イスラームの『神学大全』とも呼ぶべき重要な作品である。またトマス・アキナスの『神学大全』にも強く影響を与えていると言われている。以下に翻訳した、『幸福の錬金術』（キミヤイエ・サアードト）は、この『宗教諸学のよみがえり』を、ガザリー自身が彼の母国語であるペルシア語で要約したものであるが、実際には、単なる要約にとどまらず、彼の信仰と思索の結論とも言える事柄を、広く大衆一般に向けて著したものとされている。

この『幸福の錬金術』は、四章からなる序論に、四部からなる本論、各部一〇章、すなわち全四四章で構成されている。なかでも四章からなる序論は、ガザリーの神学全体に対する鍵とも呼ぶべき箇所である。この四章の内容は、以下の通りである。

一章 自己に関する知識

二章 神に関する知識

三章 現世に関する知識

四章 来世に関する知識

今回は、一章八節までの試訳を掲載した。

第一章 自己を知ることについて

全能なる神に対する知識の鍵は、自己を知ることであるということ。汝は認識せよ。このゆえに（聖なる伝承において）「誰であれ自己を知るものは、自らの養育者なる神を知るのである」と言われており、また栄光に輝く偉大なる神が、「我がしるしを、世界とその中に生けるものの内において、彼らに授けよう。さすれば、神に関する真理が、彼らに対して明らかになるであろう」とお語りになったのもまた、このゆえである。

すべての事柄の中で、汝にとって汝自身よりもっと近いものは存在しない。汝が汝自身を知らないとすれば、他のものをどうして知ることがあろうか。また、私は私自身をまさに知っている、と語る汝よ、汝は間違いをおかしているのだ。なぜなら、そのような知り方は、神に対する認識の鍵にはふさわしくないのである。つまり、動物といえどもそのようなことは知っているのである。汝が汝自身について知っていることと言えば、外面的なこととしては、頭や顔や手や足、肉や皮膚を汝が備えているということより以上のことではないのである。また、内面的なこととしては、汝が

عنوان (اول)

(در شناختن نفس خویش)

بدانکه کلید معرفت خدای عزوجل معرفت نفس خویش است، و برای این گفته اند: «مَنْ عَرَفَ نَفْسَهُ فَقَدْ عَرَفَ رَبَّهُ»^(۱) و نیز برای اینست که گفت اریزد سبحانه و تعالی: «سَبِّحْهُمْ آيَاتِنَا فِي الْأَفَاقِ وَفِي أَنفُسِهِمْ حَتَّىٰ يَرْتَبِّينَ لَهُمْ أَنَّهُ الْحَقُّ» گفت نشانها، خود در عالم و در نفوس ایشان بایشان نمایم، تا حقیقت حق ایشانرا پیدا شود.

در جمله هیچ چیز بتو از تو نزدیکتر نیست، چون خود را شناسی دیگر را چون شناسی؟ و همانا که گویی من خویشتن را همی شناسم و غلط میکنی! که چنین شناختن کلید معرفت حق را نشاید، که ستور از خویشتن همین شناسد، که تو از خویشتن سر و روی و دست و پای و گوشت و پوست ظاهر بیش شناسی، و از باطن خود این قدر شناسی که چون گرسنه شوی نان خوری، و چون خشم آید در کسی افتی، و چون شهوت غلبه کند قصد نکاح کنی، و همه ستوران با تودرین برابرند. پس ترا حقیقت خود طلب باید کرد: تا خود چه چیزی، و از کجا آمده، و کجا خواهی رفت، و اندرین منزلگاه بچه کار آمده، و ترا برای چه آورده‌اند، و سعادت تو چیست و در چیست، و شقاوت تو چیست و در چیست؟

و این صفات که در باطن تو جمع کرده‌اند، بعضی صفات ستوران، و بعضی صفات ددگان^(۲)، و بعضی صفات ذبوان، و بعضی صفات فرشتگان است؛ تو ازین جمله کدامی؟ و کدامست که آن حقیقت گوهر تست، و دیگران غریب عاریت‌اند، که چون این ندانی سعادت خود طلب نتوانی کرد؛ چه هر یکی را ازین غذای دیگر است و سعادت دیگر است: غذای ستور و سعادت وی خوردن و خفتن و گشنی کردن است^(۳) اگر تو ستوری شب و روز جهد آن کن تا کارشکم و فرج راست داری؛ اما غذا.

(۱) هر که خود را شناخت، پروردگار خویش را میشناسد. (۲) جمع دده: جانوران درنده. (۳) جفت شدن نروماده.

空腹になればパンを食し、怒りの情が起れば、誰かに襲いかかり、欲望が力を増せば、情交を求める、ということぐらいのことではないのである。しかも、すべての動物たちは、この点においては、汝と同等なのである。そこで、汝にとっては、汝自身についての真理を探求することがどうしても必要になってくるのである。そして、自分自身が何ものであるのか、またどこから来て、どこへ行くのであろうか。また、この住まいする世界の中において、何をなすために来たり、何のために汝は創造されたのか。汝の幸福とは、何であり、どこに存在するのか。汝の不幸とは、何であり、どこに存在するのか、ということを知るに至らなければならぬのである。

そして汝の内部に蔵されているこれらの性質は、その幾分かは動物の性質であり、また幾分かは野獣の性質、幾分かは悪霊の性質、幾分かは天使の性質である。汝はこれら全体のどの一つであるのか。また、汝の本質そのものといえるのはどれであり、その他は、馴染みもなく偽りの性質であるといえるのか。このことを汝が知らないうちは、自己の幸福を追求することは汝にはできないのである。これらそれぞれの生き物には、それぞれ違った栄養が存在するように、幸福も、それ

ぞれ違っているのである。動物の栄養物と幸福とは、眠りを貪り、子づくりに励むことである。汝がもしも家畜であるなら、日夜腹と生殖器のわざらに励むことを追求せよ、それは汝にふさわしいことである。しかし、猛獣の栄養物と幸福とは、貪り食うことと殺すこと、そして怒りにまかせることである。また、悪霊どもの栄養物は、邪心を吹き込むことと詐欺を働くことである。汝がもし彼らのうちのどれかに属するならば、彼らのわざらに励むがよい、そうすれば、自己の安心と幸運とに達するであろう。だが、天使たちの栄養物と幸福とは、偉大なる神の栄光の美を見つめることにあり、強欲、憎しみ、獣や野獣の性質は、彼らとは何の関わりもないのである。もしも汝の本質が、その起源において天使であるとするならば、偉大なる神を知ること求めよ、また自己を、かの栄光を見つめることに関わらせよ。そして、汝自身を欲望と怒りの手より解放せよ。また、この獣の性質や野獣の性質は、何のために汝のうちに創造されたのかということを知ること求めよ。それらの性質は、汝をその捕虜とするため、また自分たちの召使いとして日夜汝を徴用するために、創造されたものなのか。あるいは、汝が彼らを捕虜にして、汝がこれから先歩むべき旅路において、汝が彼

らを徴用し、そのうちの一人を汝自身の乗り物とし、また他の者を汝自身の武器となし、汝が、この住まいする世にあるしばらくの間、彼らを用いて、彼らの補佐によって、汝自身の幸福の種子を捕獲するためであるのか。汝が幸福の種子を我が手に獲得したからには、それらの性質は、足もとに置き、顔を汝自身の幸福の本宮に向けるがよい。その幸福の本宮とは、神ご自身の特性を備えており、天国の住民たちの性質を備えているのである。

かくてこれらの意味の全体は、汝が自己についてわずかでも知るためには、汝が知らなければならぬことである。また、このことを知らない者は、誰であれ、宗教の道において、ただ単に皮膚（表面的なこと）の分け前に与かっているにすぎず、宗教の真理の心髄は彼にとって覆いを掛けられた状態にあるといえる。

第一節 人間はいくつのものから創造されたのか

汝がもしも汝自身を知ること欲するならば、汝がどのように創造されたのかを知らねばならない。汝は二つのものから創造されたことを知るべきである。一つは外面に表れている部分であり、これを身体と呼ん

でいる。この身体は、肉体的な目で見ることができる。そしてもう一つは、内面的な実体であり、それを靈魂（ナファス）とも生命（ジャン）とも心（デル）とも呼んでいる。それは、内面的な洞察力によって認識することができ、肉体的な目では見ることはできないのである。また、汝の実質は、その内面的実存である。また、それ以外のものはすべて、その従者であり、軍隊であり、召使である。そして我々は、それに心という名前を与えることにしよう。また、我々が心について解説するに際しては、この人間の実体を、時には靈（ルーフ）と呼び、時には靈魂（ナファス）とも呼ぶことになるであろう。この心とは、胸の左側の部分に据えられている、あの肉の塊、つまり心臓のことを言っているのではない。それには、大した価値はないのである。動物にさえそれは存在するのであり、死体にもそれは存在するのである。また、それは外面的な目で見ることもできる。また、外面的な目で見ることもできるものはすべて、この世界に属するものである。そしてそれを「目に見える世界」（アーレム・シャハーダト）と呼んでいる。ところで、心の実質は、この世に属するものではない。それは、この世には他所者として来たり、旅の途上においてやってきている

第二節 心(デル)の本質を知ることについて

のである。また、その外面的な肉の塊は、心のための乗り物であり、道具である。そして身体すべての肢體は、それに所属する軍隊である。そして身体全体の王とは、まさに心のことである。偉大なる神ご自身と神の美の顕現を知ることが、心の属性である。義務は心の上であり、議論も心と共にある。非難も懲らしめもそれに対してであり、幸福と不幸の根本は、心にこそあるのである。身体内部に含まれるものはすべて、心の従者である。また心の本質を知ること、心の諸性質を知るとは、全能なる神を知ることへの鍵となるのである。従って、汝が心を知ることを目指めるように努めよ。なぜなら、心は、貴重な本質であり、またそれは、天使の本質に由来するものであるからである。また心の源となる鉞山は、全能の神ご自身である。心は、その源からこの世に來たり、また再びそこへと帰って行くであろう。それは、移住者としてこの地に來たり、商売をしたり耕作をしたりするために、この地に來たのである。また後ほど、偉大なる神のおぼし召しにより、この商売と耕作との意味を汝は知ることになる。

汝が心の存在を知ることができるまでは、心に関する真理を獲得することができないということ、汝は知らねばならない。そしてその後、心に関する真理について、それが如何なるものであるのかを知り、それに属する軍隊を知り、心とこの軍隊との関係を知り、その後、心の性質について知ることになる。つまり、至高の神を知ることが心にどのように獲得されるのか、また自己の幸福にどのように達するのかわかることを知ることになるのである。そしてこれらの一つ一つの事柄について解説がされるであろう。

しかし、心の存在は明らかである。人間は、自己の存在について全く疑念を持たないのである。だが心の存在は、この表面的身体によって明らかになるのではない。というのは、死者には生命がないとしても、心は存在するからである。そして我々は、この心によって、靈(ルーフ)に関する真理を求めているのである。またこの靈がなくなるときは、身体は死体となるのである。そして、人が目を閉じて、自己の身体を忘れ、空や大地、さらには目で見ることのできるあらゆるものを忘れるとするならば、自己の存在を必然的に認識す

ることになろう。つまり、身体や大地や空や、さらにはその中に存在するあらゆるものに関して気づかないにしても、自己の存在には気づくであろう。そして、人は、自己の内面をよく熟考すると、来世に関する真理の幾許かを知ることになり、肉体が分解され存在しなくなったとしても、自己は非存在になるわけではない、ということも許されるということを知るのである。

第三節 心の本質について

だが、霊（ルーフ）の本質については、つまりそれが如何なるものであるのか、またそれに固有の性質とは何であるのかを（探求すること）については、イスラム法による許可は与えられてはいない。このゆえに、使徒——彼の上に神の平安あれかし——は、詳しく語ってはいないのである。また至高なる神も同様にお語りになった。「彼らは汝に霊について尋ねるのである、（その時には）言え、霊は我が神の神意により来たと」。これ以上の指図は得られずに、次のように彼は語っている。「霊は、要するに神の働きに由来し、また『神意の世界』に由来するのである。またその世界からやってきたのである」。「創造と神意とは隔たりが

あることに注意せよ」。創造の世界と神意の世界とは別々のものである。面積とか尺度とか量と関わりのあるあらゆるものは、『創造の世界』に属すると言われるのである。そして、創造（ハルク）とは、言葉の元来の意味においては、寸法を取ることである。また、人間の心には尺度や量は存在しないのである。このゆえに、それは部分に分けることはできないのである。もし部分に分けることができるならば、その一つの側においては、ある事柄に関して無知であって、それと同時に他の側においては、その事柄に関して知識を有することになるだろう。また同一の状況において、知識を有すると同時に無知であるということになるであろう。そしてこのようなことは不可能である。この霊（ルーフ）というものは、部分に分けることができず、尺度と関わりを持たないのであるにもかかわらず、創造されたものである。そして創造（ハルク）を、創造すること（アーフェリーダン）とも言うし、寸法を取る（タグディール）とも言う。従って、この創造されたという意味において、霊は、創造全体に属しているが、あのもう一つ別の意味においては、神意の世界に属しているのであり、創造の世界に属しているのではない。というのは、神意の世界は、面積とか

尺度と関わりのない事柄から構成されているからである。

それで、霊（ルーフ）は永遠の昔から存在するものである、と考えた人々は、誤りを犯していたのである。また、霊（ルーフ）は偶有であると語った人々も、誤りを犯していたのである。というのは、偶有（アルズ）にはそれ自体において開始を持たないし、従者でもないからである。また霊魂（ジャーン）は人間の本質であり、肉体は霊魂の従者であるので、どうして偶有であることになろうか。また、それは物体であると語った人々も、誤りを犯していたのである。というのは物体は分割可能であるが、霊魂（ジャーン）は、分割不可能だからである。しかし、それをも霊（ルーフ）と呼んでいるのだが、分割可能なもう一つ別のものが存在するのだが、その霊は、動物においても存在するものである。しかし、我々が心（デル）とも呼んでいる霊（ルーフ）は、至高なる神に関する知識の場所であり、これは動物においては存在しないものである。この心（デル）とも呼ばれている霊（ルーフ）は、物体でもないし偶有でもないものである。それはむしろ、天使たちの本質と同一種類の本質である。この本質に関する真理を知ることが、困難である。またそれを詳細

に解明することは、許されてはいないのである。また、宗教の道を歩むその出発において、そのような知識は、必要ではないのである。むしろ、宗教の道の第一歩は、自己の内なる聖戦（モジャーヘダト）つまり克己の努力である。人がこの聖戦に身を賭す時には、誰かから聞かなくとも、ほかならぬこの知識をその人は獲得することになるのである。そしてこの知識は、至高なる神が、「我らのうちにおいて、（克己の）戦いの努力をする者に対して、我らは彼ら自身の道において、彼らを導くのである」と語られた、あの導きのうちの一つに属するのである。そして、この自己の内なる聖戦はまだ完了していない人に対しては、霊（ルーフ）に関する真理を語ることは、許されてはいないであろう。だが、この自己の内なる聖戦よりも前に、心（デル）の軍隊について知らねばならない。というのは、心の軍隊を知らない人は、聖戦（ジェハード）を実行することはできないからである。

第四節 人間に身体が必要である理由についての説明

汝は、身体が心という王国であることを知らねばならない。そしてこの心という王国の内部には、様々な

軍隊が存在するのである。そして「汝の養育者（神）ご自身を除いて、汝の軍隊をご存じなものは存在しない」。そして（神によって）心は創造されたのであるが、それは来世のために創造されたのである。彼（心）のなすべき務めは、幸福を求めることである。彼の幸福は、至高なる神に関する知識において存在するのである。至高なる神に関する知識は、彼に、至高なる神の創造のわざに関する知識を獲得させる。そしてこの創造のわざとは、世界全体のことである。世界の驚異に関する知識は、感覚という道によって彼に獲得される。そしてこの感覚には、身体という支えが存在するのである。従って、知識は彼が獲得する獲物であり、感覚は彼の網である。そして、身体は彼の乗り物であり、彼の網の運搬人でもある。そこで、心には、この理由によって、身体が必要となるのである。そして彼の身体は、水と温度と体液の混合物である。またこのゆえに、弱い存在であり、滅びの危険のなかにあるのである。内からは、飢えと渇きのゆえに、外からは火と水のゆえに、また敵対者たちや野獣たちおよびそれ以外のものたちの計略のゆえに、滅びの危険にさらされているのである。それで、彼には、飢えと渇きのゆえに、食物と飲み物が必要となるのである。このゆえ

に、二つの軍隊が必要となるのである。そのうちの一つは、手や足や口や歯、また胃のような外面的なもの、もう一つのは、食物や飲み物に対する欲望のような、内面的なものである。外からの敵たちに対する攻撃のゆえに、彼には二つの軍隊が必要になる。そのうちの一つは、手や足や武器のような外面的なもの、もう一つのは、怒りや憎悪のような内面的なものである。また、見えない食物を求めるとは不可能であり、また見えない敵を攻撃することも不可能であるので、彼には知覚力が必要になる。そのうちの幾つかは、外面的なものであり、それは、目と鼻と耳つまり視覚、嗅覚、聴覚、そして味覚、触覚のような五感のことである。また幾つかは、内面的なものであり、それもまた五つあり、その住みかか脳である。それらは、想像力、思考力、記憶力、思い出す力、空想力である。これらの力の一つ一つには固有の働きがあり、そのうちの一つがもしも損害を被ることになれば、一人の人間の働きが損害を被ることになる。それは宗教のことにおいても、この世のことにおいても同様である。これら外面的軍隊および内面的軍隊の全体が、心（デル）の命令下にあるのである。そして彼（心）は、すべてのものの支配者であり王である。彼が語るとい

う況においては、舌に命令を与え、掴むために手に命令を与え、歩くために足に命令を与え、眺めるために目に命令を与え、思いを巡らすために、思考力に命令を与えるといった具合である。そして、すべてのものをそれぞれの性質や職務に応じて、彼に従順に服従するものとなすのである。そうすることによって、自己の子孫を増やし、自己の成果を獲得し、来世に対する営みを完成させ、自己の幸福の種子を播くために、できるかぎり身体を養うことができるのである。この軍隊が心に服従する姿は、天使たちが至高なる神に服従する姿に似ている。というのは、彼らは、どの命令にも反逆することはできず、むしろ性質と職務に応じて命令に従順だからである。

第五節 心の軍隊の目的を譬えによって知ることについて

心の軍隊に関しての詳細な知識は、話が長くなる。その目的とするところは、譬えによって汝に明らかにされるであろう。身体は、国家に譬えられ、手や足やその他の肢体は、国家に仕える役人に譬えられることを、汝は知るべきである。また、欲望は、税吏のごときものであり、怒りの感情は、警察署長のごときもの

である。そして心が国王であり、理性は国王に仕える宰相である。国王が王国を秩序をもって維持するには、国王にはこれらすべての役人たちが必要になる。

だが、税吏であるところの欲望は、嘘つきであり、お節介焼きであり、嘘を混ぜる（厄介な）存在である。そして、宰相である理性が語ることを、何でも反対にひっくり返し、王国のなかにある資産を、税を口実にして全部手に入れてやろうと、いつも願っている。また、警察署長であるところのこの怒りの感情は、邪悪で厳しく、荒っぽく鋭敏な性格である。そしてすべてをのを殺し破壊し、撒き散らすことを好むのである。国王が、すべて宰相と相談しつつ行うならば、嘘つきで欲深い役人を無視して、その役人が宰相に反対して語ることが一切聞かないようにし、またその役人がお節介を焼かないように、警察署長に彼を監視させる。また警察署長も、自己の限度から足を踏み越えさせないために、しっかりと押えつけておく。このようにすることによって、国の仕事は規則に従ったものとなるのである。まさにそれと同様に、国王である心は、宰相である理性の指示によって行い、欲望と怒りの感情を理性の配下としその命令のもとにおき、理性がそれらのものに征服されないようにしてことを行うときに

は、王国である身体は秩序をもって維持されるのである。そうすれば、幸福への道と神の現臨に達するための道は、彼に対して遮断されることはないのである。また、もしも理性を欲望と怒りの感情の従者とするならば、王国は荒れ果ててしまうことになり、国王は不幸になり、破滅することになるのである。

第六節 欲望、怒り、身体、感覚、理性、心を正しく用いる方法

今までたどってきた道筋において、欲望と怒りの感情が食物と飲み物のため、また身体を維持するために創造されたことを、汝は知ったのである。そこで、この両方とも身体の召使いであることになる。また、食物の飲み物は、身体のための飼料であり、身体は、感覚の運搬のために創造されたのである。そこで、身体は感覚の召使いであることになる。また、感覚は、理性のスパイとして創造されたのである。それは、感覚が理性の網の役割を果たすことによって、理性が至高なる神の創造の業の驚異を知るようになるためである。そこで、感覚は、理性の召使いであることになる。また、理性は心のために創造されたのである。それは、理性が心の蝸蠖となり灯となり、理性の光によって、

心が神の現臨に接することになるためである。そしてそれが、心にとつての天国の状態である。そこで、理性は心の召使いであることになる。そして心は、偉大なる神の美を見つめるために創造されたのである。そこで、心はこのことに専念するゆえに、神の宮殿の奴隸また召使いであることになる。そして、至高なる神が、「我らは、人間とジンを創造したのは、ただ彼らが（神を）崇拜するためである」とお語りになったのは、まさにこのことを意味しておられるのである。

かくて、心が創造され、心にこの王国と軍隊が与えられ、この身体という乗り物が従者として彼に与えられたのであるが、それは、この地上の世界から、至上の世界への旅を行うためである。神が、このような恩恵を施し、約定を実行に移されることを、心がかもしも欲するとするならば、心は、王にふさわしく、王国の最高位に座さなければならぬ。そして、至高なる神をキブラ（礼拝の方向）とし目標とし、来世を故郷とし住みかとし、この世を宿りの住みかとし、身体を乗り物とし、手や足やその他の肢体を召使いとしなければならぬ。また、理性を宰相とし、欲望を税吏とし、怒りの感情を警察署長とし、感覚をスパイとし、それに別々の役割を委託しなければならぬ。それは、

彼らが、その世界の情報を収集するためである。そして、脳の前部にある想像力を諜報省の長官としなければならぬ、それは、スパイたちがすべての情報を彼のもとに集めるためである。また、脳の後部にある記憶力を文書監理官としなければならぬ、それは、情報報告書を諜報省長官の手から受取り、保管しておくためである。そして、しかるべき時に、宰相である理性に、報告をするのである。そして宰相は、王国（の各地）から彼のもとに達した情報に従って、王国の方策と国王の旅の方策を練ることになるのである。そして、欲望や怒りの感情といったような軍隊の一員、およびそれ以外の者たちが、国王に対して反逆を起したり、国王への服従から逃げ出したり、国王の旅の途上において追剥ぎを企てようとしていることを彼が発見する時には、国王の聖戦に専念するのだが、国王が彼らを殺そうと決意しないように方策を講じてるのである。というのは、彼らがいなければ、王国が秩序正しく維持されることはないからである。宰相である理性は、むしろ彼らができる限り服従させるようにするための方策を講じてるのである。そうすることによって、これから先進むべき旅において、彼らが敵となるのではなく助手となり、強盗や追剥となるのではなく友と

なるためである。このように実行する時に、幸運が生じ、恩恵を報酬として得ることとなるのである。そして彼は、しかるべき時に、この恩恵という恩賜の衣を手に入れるのである。だが、もしも宰相が、これと反対のことを行い、反逆をすでに起こした追剥たちと敵たちと一致して反乱を起こすならば、彼は忘恩の徒となり、不幸をもたらすことになるのである。そして、そのことに対する処罰を受けるのである。

第七節 人間における良い性質と悪い性質の現れ方について

人間の心は、彼の中に存在する二つの軍隊のそれぞれと関連していることを、汝は知るべきである。そして人間には、その両方のそれぞれからの性質や特性が現れるのである。その性質の幾つかは、悪いものであり、人間を滅ぼすのである。また幾つかは良いものであり、人間を幸福に到達させるのである。それらの性質全体は、たとえ数は多くとも、結局四種類である。つまり、動物の性質、猛獣の性質、シャイタン（悪魔）の性質、そして天使の性質である。かくして、人間の内に貪欲という欲望が据え付けられたことが原因で、食べることや性の営みを行うことに貪欲になると

というような、動物のわざを行うのである。また、人間の内に怒りの感情が据え付けられてたことが原因で、手や舌（言葉）で、攻撃したり殺したり、人々と論戦するというような、犬や狼や獅子のわざを行うのである。また、人間の内に狡猾や策略や欺瞞、人々の間に混乱や暴動を煽動するという性質が据え付けられたことが原因で、悪魔のわざを行うのである。また、人間の内に理性が据え付けられたことが原因で、天使のわざを行うのであるが、それは知と正義を好み、醜い行いを節制し、人々の間に正義を探索し、無知で卑しい行いから離れて我が身を大切に保ち、物事を知ること喜びとし、無知蒙昧を不名誉と見做すといったようなことである。

人間の皮膚の下には、四つのものが存在すると汝が語るのには、まさに真理に即している。そしてその四つのもとは、犬と豚と悪魔と天使である。ところで、犬は、口にすべきではない、卑しむべきものであるが、それは犬の姿や、手足や、皮のためではなく、犬の中にある性質のためである。その犬の性質が人間の内に起こるのである。また、豚というのは、その卑しむべき姿のゆえではなく、汚れたもの醜いものに対して貪欲であり強欲であるという意味のゆえである。そし

て犬的精神とか豚的精神についての真理とは、まさにこの意味のことを言っているのである。そして人間の内には、まさにこれが存在するのである。まさにそれと同様に、悪魔性とか天使性についての真理とは、すでに語られたような意味のことを言っているのである。そして、人間には次のことが命じられているのである。すなわち、天使たちに属する様々な光のなごりであるところの、理性の光によって、悪魔の欺瞞と狡猾を発見し、そうすることによって悪魔に恥をかかせ、如何なる暴動も煽動できないようにすることである。それはちょうど、使徒——彼の上に神の平安あれかし——が語ったごとくである。彼いわく、「どの人間にも、悪魔が潜んでいる。そして私自身にも、それは存在するのである。だが、至高成る神は、私が、悪魔を征服し、悪魔が如何なる邪悪も働けないように、私に助力を与えられたのである」。さらにまた、人間には次のことも命じられているのである。すなわち、この強欲と欲望という豚と、怒りの感情という犬を、しっかりと訓戒し服従させ、彼の命令による以外には、立ちも座りもしないようにさせる、ということである。もしも彼がこのように行なうならば、彼には、このような特性と性質から、良いものを獲得することになるの

である。というのは、そのことが、彼の幸福の種子となるからである。またこれと反対のを行い、それらの性質に服従させられるとすれば、人間の中に、悪い性質が現れ、彼の不幸の種子に変わってしまうのである。

またもしも、彼の状況が、寝ても覚めても、譬えで述べた状況のように、自己を豚や犬に服従させられているのを発見すれば、またあるイスラム教徒を異教徒の虜にさせているような状況であるのを発見すれば、その人間の状況がどのようなものであるかは、明らかである。天使を犬や豚や悪魔の虜にさせるようなことをする人は、彼の状況は、これよりもさらにひどいものとなってしまっているであろう。

そして多くの人々は、もしも公正な裁きが与えられ、怠慢というペールが剥がされ、日夜自己の願望や欲望にすっかり服従させられてしまっているとすれば、彼らの状況は、まさにこのようなものである。つまり、姿は、今は人間の姿に留まっているとしても、明日になり、甦りの時になって、本質が白日のもとにさらされることになれば、姿が、本質に一致して現れることになるであろう。かくして、欲望と強欲が、その人の上に優勢を誇っていたれば、明日になると、その人は豚

の姿で見られるであろう。また怒りの感情が、その人の上に優勢を誇っていたれば、狼の姿で見られるであろう。

このようなわけで、ある人が夢で狼を見るならば、その夢占いは、その人が暴君であるということであろう。またもしも豚を見るならば、その夢占いは、その人が汚れた人であるということであろう。夢という手段によって、この世からあれほど離れることになるために、夢は、死の様を示すものとなるのである。そして姿が、その本質に従うことになるのである。そのようにして、誰であれ、その人の内面がそのようであるとすれば、そのような姿で見られるのである。このことは偉大な神秘であり、この書物は、その神秘の詳細については推測すべきではないだろう。

第八節 自らの為すべきと為さるべきことに対する警戒について

さて、汝は、汝の内面にはこれら四種類の管理者および指揮者が存在することを知ったのであるから、自己の為すべきことと為さざるべきことに警戒せねばならない。この世界において、この四種類のどれに対して服従するのか注意せよ。汝が行うあらゆる行為から、

その性質が汝の心に獲得されるということをし、しっかりと認識せよ。なぜなら、その性質は汝の内に留まり、あの世界にまでそれを汝と共に携え行くことになるからである。そしてその性質を特性と言ふのだが、すべての特性はこれら四種類の管理者に分けられるのである。

もしも汝が欲望という豚に服従するならば、汝の中には、汚れ、恥知らず、貪欲、へつらい、偽善、吝嗇、嫉妬、他人の不幸を喜ぶ感情、その他の性質が、現れるのである。そして汝がそれを征服し、理性と聖伝のもとにしっかりと服従させておかならば、汝の中には、満足、自制、廉恥、平静、上品、敬虔、控え目、節制という性質が現れるのである。

もしも怒りの感情という犬に服従するならば、汝の中には、高慢、軽率、不浄、ほら吹き、高く売りつけたり、策略を練る性質、見栄をはり、圧迫をくわえ、侮辱する性質、人々を侮り、人々を攻撃する性質が現れるのである。また、もしもこの犬をしつかりと服従させておかならば、汝の中には、忍耐、我慢強さ、許し、安定、勇気、冷静、勇敢、魅力という性質が現れるのである。

また、この犬や豚を駆り立てて、彼らを勇気付け、

欺瞞と誤魔化しを教え込むことを生業とする、あのシャイタン（悪魔）に、もしも汝が服従するならば、汝の中には、狡猾、背信、混乱、邪悪な精神、騙し、欺きという性質が現れるのである。そして汝が、それを征服し、その欺きに騙されないようにするならば、そして理性の軍隊を手助けするならば、汝の中には、利口、知識、知恵、人々に対する正義を求める性質、偉大さ、統轄力が現れるのである。そして汝と共に留まるこの良き性質は、善行の残余の一つとなるであろう。また汝の幸福の種子となろう。

そして、人間の中から悪い性質が行為として表面に現れてくると、それは「罪」と呼ばれるのである。そして人間の中から良い性質が表面に現れてくると、それは「服従」と呼ばれるのである。そして、人間の為すことと為さぬことすべては、この二つのどちらかであることを免れないのである。

また、心は、ちょうど明るい鏡のようなものである。また、これらの汚れた性質は、つねにその鏡にまで達する、すすやくもりのようなものである。そしてそれが、鏡をつねにくもらせることによって、神の目前に達する道の前途が見えなくなり、ベールで覆われてしまふのである。そしてこれらの良き性質は、つねに心

にまで達する光である。そしてその光は、心を罪のくもりから浄化するのである。使徒―彼の上に平安あれかし―が次のように語ったのも、まさにこのことについてなのである。「あらゆる汚れの後には、その汚れを消し去るために、善を行え」。そして、心が白日のもとにさらされることになる甦りの時には、心は、あるいは明るく、あるいはまたくもったものになるであらう。「かくて、神のみ前に健全で明るい心を伴って進み出る者の他には、救いを獲得することはないであらう」。

人間の心は、創造の初めにおいては、鉄のようであり、それから明るい鏡が生ずるのである。そして、その鉄があるべき状態に維持されるならば、世界のすべてがその鏡に輝き出るのである。さもなければ、鉄全体に錆が付着し、もはやそれから鏡が生ずることはないのである。まさに至高なる神が、「いやいや、彼らの心には錆が付着している、そんなことを彼らはいっもしていたのだ」と仰せられた通りである。